

## 笠間陶芸大学校事業による人材育成

佐藤 雅之\* 五味 謙二\* 根本 達志\*

常世田 茂\* 尾形 尚子\* 吉田 博和\*\*

### 1. はじめに

日本は世界でも類を見ない陶芸大国であるが、諸外国においては芸術と窯業と別々の産業と捉える傾向があるため、両方の魅力を持った陶芸文化について発信することが重要である。

本事業では「現代陶芸をリードする陶芸家の輩出」と「手作りを基本に日用陶磁器を生産」の両面を併せ持つ次世代をリードする人材育成を行っているが、試行年度である平成27年と平成28年・平成29年度の比較・評価を行った。

本報告では試金石となる第1期生を輩出し一区切りとなるタイミングで、目的とする人材育成事業について検証を行ったので報告する。

### 2. 目的

人材育成事業を図式化すると図1となる。本報告は図1の1~5項について検証を行い、改善点についてまとめた。

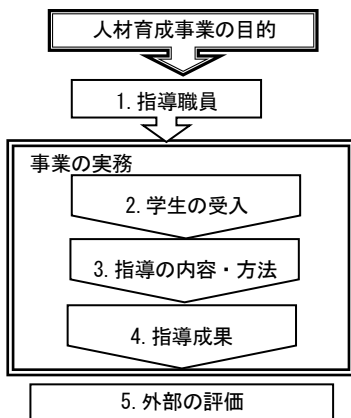


図1 育成体制と検証

### 3. 検証内容

#### 3.1 指導職員・施設設備

基本的な指導方針として「第一線で活躍する陶芸作家が常勤で毎日指導にあたり、学生の志望する方向性に応じ個別にきめ細やかな指導を行う」となっており、表1の様を示す各職員が専門分野毎に補完しあいながら指導にあたった。

表1 指導職員体制

	陶芸学科 1年	陶芸学科 2年	研究科
特任教授A (1人)	◎	○	○
特任教授B (1人)	○	◎	◎
嘱託職員 (1人)	○	○	○
研究職員 (4人)	△	△	△

主担当 (◎) 副担当 (○) 一部担当 (△)

\*人材育成部門 \*\*工芸・材料技術部門

また指導範囲は図2に示す従来の指導工程に加え、平成27年度より社会的・自立に必要な能力として生産物(作品)のプレゼンを追加した。



図2 指導範囲

課題制作においてはプレゼンテーション能力を高めるため、県立陶芸美術館での卒業制作展の他、茨城県庁ロビー・地元商店街の空き店舗・市内美術ギャラリーで一般県民への展示を行った。(図3)



図3 展示会の様子 (茨城県庁)

#### 3.2 学生の受入

○募集活動の検証

学生募集において、後発ではあるが全国から優秀な人材を募るため、募集活動①~⑤を行った。

- ① オープンキャンパスの実施(年間2回の授業体験)
- ② 専門誌への広告(年間1回2誌)
- ③ 大学等への訪問(年間約40校)
- ④ HP・SNSによる周知(年間約20回)
- ⑤ OB・業界からの周知(年間約10回)

応募者が提出する入学願書に設けた「当校をどこで認知したか」というアンケートの集計を行ない(複数回答)、応募に有効であった募集活動項目①~⑤の各合計数値と募集人数(10名)から、実際の応募倍率に貢献した有効倍率を計算した。

その結果①及び④については倍率100%超であったが③及び⑤については倍率100%未満であった。

また②については0%であったが、社会認知性から必要項目と考えられるので、引き続き行いたい。

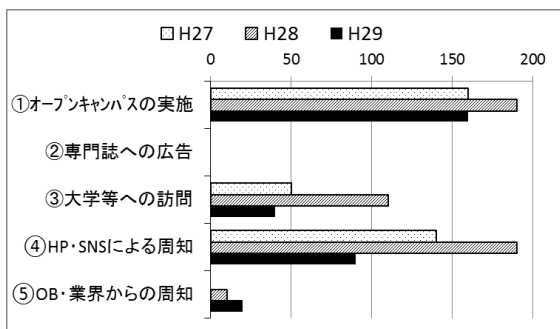


図4 募集活動の有効応募倍率 (%)

### 3.3 指導の内容・方法

内容を事業ミッションに沿ってA群とB群に分けた。

<A群>

- ・モノ作りをする個としての考える力
- ・独自の表現を確立するための技術

<B群>

- ・時勢に敏感な嗅覚・広い視野

A群は主として課題制作を通し、制作品について職員・外部講師による講評会で評価する。

B群は特別講座や課題内で行う外部講座・校外研修などで、レポート提出により評価を行った。

これにより各課題の習得状況レベル毎の指導を行うことが出来た。

一方、時期やタイミング・必要な時間数などの手法に調整が必要と思われたが、全体としては良好に行うことが出来た。各学年指導課題は表2~4のとおり。

表2 陶芸学科1年 カリキュラム

	課題名	内容
A群	導入課題I	土の可能性を探り造形にする
	導入課題II	土の可能性から球体造形を展開する
	成形課題	手捻りでの素材の理解・成形技術の習得
	ロクロ課題	数挽きを中心に図面通りに制作する
	石膏課題	鋳込み成形にてマグカップを制作
B群	意匠課題	デッサン・上絵付・下絵付を習得する
	釉薬調合	基礎知識を習得し釉薬を調合する
	焼成実習	自主性・計画性を持ち焼成を習得する
	楽焼実習	原料から焼くまでを体感・習得する
	薪窯実習	薪による長時間焼成を体感・習得する
	特別講座	講座を受講しレポートにまとめる
校外研修	他産地視察・交流により気づいた点・得た知見をレポートにまとめる	

表3 陶芸学科2年 カリキュラム

	課題名	内容
A群	課題I 制限のある場で制限のない作品をつくる	制約のある空間をどのように利用し、作品の存在感を考察した上でどのようにアプローチするか客観的な視点をもった制作を行う
	課題II 注器制作	図面デザインと急須・大物制作のワークショップを受講し、ロクロ成形にてお茶を飲むための注器を自由な形態で制作する

A群	課題III 暮らしの器	暮らしの中で豊かさを感じられるテーマで新しい視点、独自性・用途・形態などを考え、鋳込み成形にて制作する
	課題IV 陶板制作	建築陶器である陶板を地域のシンボルとなるようなデザイン・形状で制作する
	卒業制作 (課題制作)	テーブルウェアをテーマに制作する現代の生活に調和する器を提案する
	卒業制作 (自主制作)	現代における陶磁器表現の可能性をテーマに制作する
B群	薪窯実習	薪による長時間焼成を体感・習得する
	特別講座	講座を受講しレポートにまとめる
	校外研修	他産地視察・交流により気づいた点・得た知見をレポートにまとめる

表4 研究科カリキュラム

	課題名	内容
A群	前期課題	自主研究課題をまとめた作品展を開催する
	後期課題	研究の集大成をまとめた卒業制作展を開催する
B群	特別講座	講座を受講しレポートにまとめる
	校外研修	インターン実習・他産地視察・交流により気づいた点・得た知見をレポートにまとめる

### 3.4 指導成果

指導成果の指標として平成27年から学生への積極的な公募展出品指導を行い、入賞・入選状況の数値化を行なった。数値化は表5の通り難易度により点数配分を行ない、各年度の合計入賞・入選点数をまとめた。その結果図5の通り年々指導成果が向上していることが分かった。

今後、他の指導成果の指標として卒業制作展での一般評価なども行い、成果データの比較検討を行いたい。

表5 公募展評価表

	入賞	入選
全国・世界規模の公募展	5点	3点
国内・地域規模の公募展	3点	2点
県内公募展	2点	1点

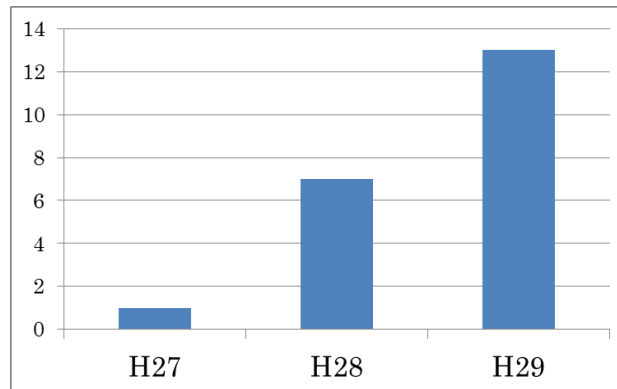


図5 公募展入賞・入選状況からみた指導成果

### 3.5 外部の評価

検証3.1から3.4までの指導内容について外部有識者（大専校顧問、業界、地元機関）による有識者委員会を行ない（図6）、結果は以下のとおりとなった。

- ・平成27年度：おおむね良好
- ・平成28年度：おおむね良好
- ・平成29年度：募集活動について要改善



図6 委員会による評価の様子

平成29年度について募集活動（応募者増へつながる募集活動への取組み）への指摘があり、次年度以降は委員の意見を取り入れた活動を行いたい。

### 4. 検証結果と今後の課題

次世代をリードする人材育成事業についての検証結果は以下の通り。

- 1) 学生の志望する方向性に応じ個別にきめ細やかな指導を行うためには、職員が専門分野等を相互に補完しながら進める事で達成できた。
- 2) 学生の受入において、全国から優秀な人材を募るためには、時世に応じた活動の工夫が必要であると思われた。
- 3) 指導の内容・方法においては、課題制作や制作品の講評、レポート制作の時期やタイミング・必要な時間数などの手法に調整が必要と思われたが、全体としては良好と思われた。
- 4) 公募展出品による指導成果は年々指導成果がみられており、卒業制作展での一般評価の導入なども今後検討したい。
- 5) 学生受け入れ、指導の内容や方法、指導成果については、有識者委員会において、継続的に広範囲からの意見を徴し、本事業の質向上に役立てたい。